

「……め……し……」

どうにか声を頑張がんばって絞り出して、それだけ口から吐き出して、僕は力を失った。

指先から、紙切れがはらりと落ちる。

そして僕の視界は、閉ざされた。

「……全まったく。とんだお馬鹿ばかね。この子」

そんな冷たい声だけが、やけに鮮明にきこえた。

そして僕は死んだ。多分。

○

あ、生きてた。

美味しそうな香りもしくは僕のお腹のあたりから発生した食事の催促で目を醒ました僕は、そこが見知らぬ場所であることへの疑問よりも先に、僕の服がなぜだか可愛いピ  
ンク柄の pajama に成り代わっていることへの羞恥心より  
更に先に、ひいては視線の先でさっきの彼女が手際よく料理を作っている光景を目の当たりにするよりも更に更に先に、そんなことをぼんやり考えていた。

……………。

いや、というか何事ぞ？

「起きたみたいね。今ごはんを作っているからしばらく待  
つていて頂戴」

振り返らずに、彼女は言った。

「それと、あなたの服、濡れてたから外で干しておいたわ。乾くまでまだ時間がかかるから、しばらくそれで我慢して」

……………。

マジで何事ぞ？

戸惑いながら、僕は起き上がる。

視線を巡<sup>めぐ</sup>らせてみると、どうやらここは彼女の寝室のよう  
うで、古びた木造り床と、真っ白の壁の一室には、必要最低限の家具だけが置かれていた。真昼の太陽は窓から中へ光を伸ばしていて、柔らかい風が、ベランダに並べられた洗濯物を揺らしていた。

あんりよく

暗緑のスラックス、それと白のシャツ、ブラウンのジヤケット、それとキャスケット―僕の服だ。いつもスラックスのポケットに突っ込んでいるはずの懐中時計はそこにはなくて、テーブルの上で静かに時を刻んでいた。

ちらりと時計を覗き込む。

なるほど僕はどうやら二、三時間も眠りこけてしまっていたらしい。

「さつきはすっかり蹴つてごめんなさい。まさか餓死寸前とはね……。ただの酔いどれだと思つて冷たく当たつちやつたわ。ごめんなさい」

淡々と、重ね重ねに謝りながら、彼女は目の前のテーブルにパンやサラダ、それからシチューなどの簡単な料理を

並べる。

それと二人分の取り皿も。

「これは、まあ……私からの謝罪の気持ちよ」

反対側のソファに腰を下ろした彼女はにわかには笑みを浮かべる。

……やだ惚れそう。

「……うううう。ありがとうございます……ありがとうございます……」

「礼を言われる程でもないわ。あと敬語やめて頂戴。<sup>ちようだい</sup>あなたと私、さほど歳は離れていないみたいだし」

「え、僕十七歳ですけど」

「じゃあ敬語はやめましょ」

「……………」あ、自分の年齢は言わないんだね。

「どころでどころであんなところで死にかけていたの?」

彼女は小首を傾げると、「あ、食べていいわよ」とパンを手に取り、口に放り込んだ。